

啖呵

中井 ひさ子

喧嘩をするにもエネルギーがいる。頭がいる。度胸がいる。冷静さが必要である。なによりした後、心がかりとしていないといけない。

私はすべてためである。エネルギーはともかく、頭が悪い。度胸がない。感情的である。その上した後、心がうじうじ湿りっぱなしである(特に友人に対しては)。だから喧嘩は苦手である。はずである。

なのに、すぐ頭にくる。人間ができていない。そんな時は考えるより先に言葉がでる。啖呵を切っている。

私は、仕事で阿佐谷まで自転車で通っている。急いでいる時は、細い道を通る。一列に、並んでいる学生たちを自転車のベルを鳴らして、追い抜いていった時である。

「なんだよ、ババア」

歳をとつても健在な耳はしっかりとらえた。

「ババア」は私にとって禁句だ。

「今、なにを言うたん。もう一度言うてみ！ 年寄りなめたらあかんんで」
腹が立ったら大阪弁がでる。

自転車を降りている。時間がないのである。

「俺ら何にも言つてない」

学生たちは横をむき、喧嘩は買わない。彼らのほうが、人間ができています。

「またやってしまった」

家に帰り首をすくめる私に、娘は冷たく注意する。

「そのうち刺されるからやめたほうがいい」

その娘にだって啖呵を切っている。

「今まで面倒見てきた分、しっかり返してもらおうわよ」と。

こちらも横を向き知らぬ顔である。

私だって、いつも啖呵を切っているわけではない。ある会でいわれなく「女のくせに生意気だ」と声を荒立てられ、一歩足が前に出かかった。でも、でも、場所を考え、ここでは我慢、我慢と飲み込んだ啖呵。

「それはこうだ」との強い意見に、ふと、ひるみ呑み込んでしまった、あの時の強い思い。言えなかった思いが、からだに残り時々痛い。

切らなかつた啖呵、切れなかつた啖呵より、思わず出た啖呵が愛おしい。

分別なんてもつともらしい言い訳なんか聴きたくないと、自分自身に啖呵を切っている。